

モダリティと文末詞

高 永 茂*

Modality and Bunmatsu-shi

Shigeru TAKANAGA

1. はじめに

日本語教育の進展を契機として、日本語研究の領域で「モダリティ」の概念が急速に広がってきている。現在のところ、モダリティの研究対象は、主として、いわゆる「共通語」である。これは、日本語教育からの要請もあってのことだと考えられる。しかし、モダリティの概念を、「共通語以外の日本語」へ適応する試みがあってもよいのではなかろうか。その際に問題となるのは、従来の方言研究とのかかわりである。

本稿では、とくに、モダリティと文末詞研究¹⁾を取り上げている。これは、モダリティに関係する要素は、日本語において文末に現れやすいという現象によって、文末に着目してすぐれた成果を蓄積しているのが、方言研究の領域では、文末詞研究なのである。

本稿は、一方を他方へ統合しようとするものではない。文末詞研究を分析する過程でも触れるが、文末詞の概念と研究成果は、モダリティに収まりきらない。また、モダリティ研究は、文末詞研究で扱っていない言語要素までも取り込める枠組みを持っている。ここで筆者の基本的な姿勢を述べると、次のようになる。モダリティ研究は文末詞研究の成果を吸収することによって、研究の幅を広げることができ、一方、文末詞研究は、モダリティ研究との接近を図ることによって一般言語学の場合、その成果を転移することが容易になると、筆者は考えている。

本稿の目的は、文末詞研究とモダリティ研究とを比較対照し、両者の相違点と接点を検証することにある。ただし、この目的は、おいそれと達成できるものでは

ない。文末詞研究は、独自の用語と概念規定を行いつつ、体系を構築してきている。それぞれの概念が、一般言語学の概念の何に相当するのかという検討も必要になる。モダリティ研究においても、欧米の言語を対象として得られた知見をそのまま日本語へ適応することはできないという問題がある。同時に陳述論との関係も検討しなければならない。

2. 文末詞の特質

2.1 文表現における「訴え」の機能

「文末詞」というものを、簡潔に特徴づけることは難しいが、ここでまず、「文末詞とは、文末の訴え成分が、特定の形態をもって文法化され文末に独立して存在するもの」と規定しておく。文末詞は、「訴え成分」の文法化された要素である。藤原與一は、「表現作用、今は、言語表現作用は、訴えの作用である」とする²⁾。また、「訴えるのは、話し手ないし表現者の、そのばあいの文表現内容の全体を（文表現にかぎらず、文章表現のばあいにも、その表現内容の全体を）聞き手ないし受容者に訴えるものである」とする³⁾。さらに、「訴え」の一語で表現される作用は、「知的要素と情的要素」が渾然一体となっており、重層的な表現内容を持つとする。

「訴え」の中核をなすものは、待遇敬卑の効果と考えられる。文末詞は、文の末部に位置し、待遇敬卑の表現に決着をつける機能者でもある。また、待遇意識の展開を最終的頂点的に収約するものでもある⁴⁾。

待遇表現の「文末詞法」に役だつ文末詞は、その表現する機能価値に応じて、品等わけができる。この品等わけの基準が「品位」である。品位によって、「上・中・下」と「敬・常・卑」のそれぞれ三階級に

* 教養教育

分類することができる⁵⁾。「上・中・下」とは、自分との上下関係の軸であり、「敬・常・卑」とは、文体的な変異の軸である。江端（昭和53年）には、この分類によった表が掲載されている（pp. 142-143）。

ところで、「訴え」の要素が出現する統語論上の位置は、文末とは限らない。文頭、文中、文末のいずれにも、現れることができ、同じ形態を持つものならば、質的にも深くかかわっている⁶⁾。その中でも、とくに文末に注目するのは、日本語の表現法に「文末決定性」という性質があるからである⁷⁾。この文末決定性というのは、文頭、文中、文末と分けたときの最後部の意味でもあり、文末に位置する述部の最後部という意味でもある。

日本語の持つ膠着語の性格が、文を最終的に決定づける特定成分が最後部（文末）に位置することを可能にしている⁸⁾。この点に関して藤原は、「日本語表現法の文末決定性をささえる文法構造が、文末での特定訴え要素の自由な生成と活動とを、おおいに可能ならしめた」と指摘している（下線筆者）⁹⁾。このような最終的地位を「収約的頂点」とも呼んでいる。傍線部は、文末詞の「遊離独立性」と深く関わる性質と考えられる。

藤原が最終的に「文末詞」という呼称におちついた理由も、このような文末詞の独立性にある。藤原は、初期の著作において、「文末助詞」という呼称を用いていた時期もあった。しかし、後に「文末詞」という呼称を使用するようになり、現在に至っている。訴え成分のうち、文末に特定の形態をもって現れるものに注目する。そして、その特定の形態をもつものは文末にあって自由であり、独立性に富むと見る。さらに、独立する辞は、「辞」と呼ぶよりも「詞」とよぶにふさわしい。「遊離独立性」は、文末詞を特徴づけるうえで重要な性質である。

2.2 叙述構造収約の機能

文末詞は、「主述」構造の外にたつて、一文の収約頂点にたつ。つまり、「主部—述部」を典型とする叙述は、そのみでは「文」として完結したものではなく、文末詞（特定文末部）に至って、最終的に「文」として完結をみる。このようにまとめると、文末詞の機能は、陳述論のいわゆる終助詞の機能とかなり類似している。しかし、文を収約したり、文を完結させたりする形態素（形式）の所属に関して、藤原は独自の立場をとる。藤原は、文末詞を「陳述とは、文の叙述

を、最終的に相手になげかけていくこと自体だとしたい¹⁰⁾と述べている。例えば、「知らないよ」という言い方があるとすれば、「よ」までが一連の叙述構造であるとする。かりに、文末詞に、伝達の効果があるという見方をしたとすると、この伝達の効果を生むことまで叙述と考える立場である¹¹⁾。このとき、その効果の生みかた、生みぐあいを陳述とする。文表現のじっさいの訴えぶり、効果づけが陳述である（下線筆者）¹²⁾。

この「じっさいの」という点は、ことばが音声言語として実現されるとき、文末の声調をさす。この立場は、方言（とくに「口ことば」）研究の領域で、長年、研鑽を積んできた研究者ならではのものであろう。生活の中で、多くの場合、言葉は発音することにより実現される。ことばが、ことばたりうるときには、音声形式を有している。

文末詞という形式が、口頭語として現実されるときには、形式が音声となり、音声にはさらに抑揚がかぶさることになる。

文末詞は、特定の相手が目前にいる場合に使用されるという特徴を持っている。「書きことば」や不特定の相手には現われにくい。目前にいる相手への伝達は、音声形式をとるのが必然であり、文末詞への着眼もその中から生まれたものであろう。音声と抑揚の中に「文」の最終的に完結した姿を見るのが藤原の立場だと考えられる。

2.3 文末詞の分類

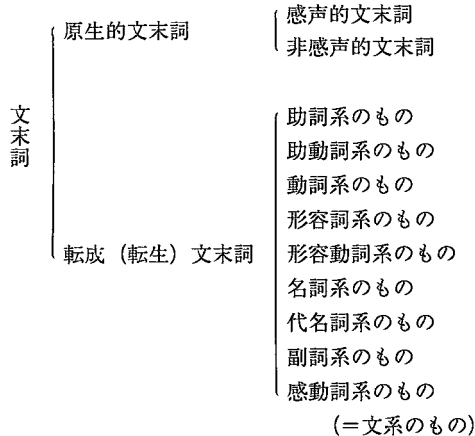
文末詞を分類することの難しさは、藤原（昭和57年）で述べられているとおりである（pp. 41-47）。文末詞の機能によって、形態によって、また通時論的な観点も含めて、など様々な分類基準が考えられる。いずれか一つの基準が正しく、他は誤りだと言うことができない以上、一つの基準を採用しつつ、しりぞけた基準と調和をとっていく必要がある。藤原自身は、形式上（形態上）の分類を重んじたいとしている。

形態は、歴史的な変化を、その「形」に反映している。現在では、異なる方言体系に属している文末詞に関して、文末詞の「形」の分布や文献の記述という客観性の高い事実を通じて歴史的な発展の仕方を追求することが可能である。

日常生活における文末詞の用法を綿密に記述するという作業は、当然行われるわけである。この作業の中で、方言体系内における、文末詞個々の機能と相互関

係とが明らかにされる。しかし、文末詞の分類は機能一辺倒ではない。文末詞の分類にも、通時論的立場と共時論的立場とを融合しようとする、「高次共時論」の理念が反映されている。

具体的な文末詞の分類は、下図のようになる¹³⁾。ただし、文末詞の分類の仕方には、研究者によって多少の差異のあることも断っておく¹⁴⁾。



分類においてとくに問題となるのは、複合形文末詞の処理である。二種以上の文末詞が連続して、「特定文末部」を形成している場合、どの文末詞に従って分類すればよいのか、あるいは、新しいカテゴリーをたてる必要があるのかが問題となる。この点について、藤原は、一つの原則をたてている。「複合形の末部本位に見ていく」としている¹⁵⁾。この原則を支持する理由は、二つあると考えられる。第一は、日本語表現法の文法決定性である。日本語の統語論上の特徴として下方に位置する要素が前方までの叙述を統括する現象が多く見られる。第二は、文末詞の訴えの機能の中核をなす待遇表現が、後接の文末詞によって、決定的に収約されることによる¹⁶⁾。

3. 陳述、ムード、モダリティ

本稿では、「モダリティ」という用語を使用している。しかし、この用語を使用するにあたっては、その概念を説明しておく必要がある。日本語研究の場では、陳述、ムード、モダリティ、という三つの用語が共存している状態である。現在、日本語研究者の間でそれぞれの用語について、かなりの部分で共通の理解ができてきているようである。しかし、同じ用語を用いても研究者により、いささか異なる内容を含んでいる場

合もある。そのため、この三つの用語の関係を検討することは議論の展開上必要なことである。

陳述という用語に関しては、これまでに幾多の論著が発表され、論争が行われてきた¹⁷⁾。陳述論研究の歴史をうけて、渡辺実は、その著書『国語構文論』において、独自の文法論を完成させた。渡辺（1971）によると、陳述の定義は次のようになる（渡辺、昭和46年、pp. 106-107）。

「陳述とは、統叙によってととのえられた叙述内容、または無統叙の素材の要素に対して、言語主体が、その素材、あるいは対象・聞手と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能である。陳述の職能を託される内面的意義としては、言語主体の断定・疑問・感動・訴え・呼びかけが認められる。」

「陳述」の内容には、研究者ごとに異同が認められるが、ひとまず、上記の渡辺の定義を取り上げておきたい。

次に、ムードとモダリティの関係である。

ムード (mood) の用語は、印欧語の文法においては、屈折 (inflection) による語形変化 (conjugation) と関わるものとして用いられてきた。例えば、イエスベルセンは、英語の動詞は三つのムード (mood) を持ち、その三つのムードとは、Indicative (直接法), Subjunctive (接続法), Imperative (命令法) だとしている¹⁸⁾。この三つのムードを区別する要件としては、動詞の形態論的な相違が重要である。

寺村のムード (mood) の規定においても、用言の活用形が、どのようなムードを発現するかという点から整理されている¹⁹⁾。寺村は、「ムード」と「陳述度」(degree of Modality) とは別の概念とする。ムードについては、その種類が問題となるが、陳述度については、その強弱が問題となる²⁰⁾。

三上章も、動詞の活用形接続の仕方から、終止法 (命令法、定言法、概言法)、中立法、条件法、連体法のムードを区別している。三上はさらに、引用形式や遊離的な形にも触れている²¹⁾。

以上のように、ムードは、話し手の文の内容に関する心的態度を表現する職能や機能の中でも、とくに動詞 (あるいは用言) の活用形と密接に結合した文法範ちゅうを言う²²⁾。

これに対して、モダリティ (modality) は、ムードを含み、さらに、統語論上の特徴や助詞、助動詞による表現、またブラグマティクス (いわゆる語用論) な

どを含む、より広い概念として用いられている²³⁾。

ムードは、動詞類の屈折体系と結びついているがゆえに、文法化されている言語もあれば、形態論上、ムードの区別のない言語も存在する。一方、モダリティは、その現れ方こそ言語によって様々であろうが、何らかの形ですべての言語に関わる文法概念である²⁴⁾。益岡(1991)は、広義の「モダリティ」を「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表す形式」と規定している²⁵⁾。その一方で、寺村のように「ネ、ヨ」などの終助詞をムードの一部に組み入れて、分析を試みる立場もある²⁶⁾。

本稿では、ムードを前述のように動詞類の屈折体系と結びつく文法範ちゅうに限定し、それよりも幅広い形式までも含む場合には、モダリティの用語を用いることにする。

次に問題になるのが、「陳述」と「モダリティ」との関係である。陳述は、日本語文法の領域で使われてきた概念であるが、両者は重なる部分も多い。

陳述では、文の完結性という概念が重要な位置を占める。印欧語の文法の領域で使われるモダリティでは「文」の完結性をさほど問題にしない。この両者の相違の生まれた原因は、よく言われるように、日本語では印欧語のような定形動詞 (finite verb) と不定詞 (infinitive) あるいは分詞 (participle)、動名詞 (gerund) といった形態上の区別がないからである。

これに対して、断定、疑問、感動、命令などの文の類型の問題や、文の伝達性の問題などは、陳述とモダリティに共通する問題である。

日本語は、印欧語のモダリティ研究にない問題を含んでいる。これは、日本語がモダリティを高度に構造化した言語であるからだとも考えられる²⁷⁾。益岡(1991)は、日本語を対象としたモダリティ研究は、印欧語のモダリティに限らず、さらに一般言語学的なモダリティ研究に対して問題提起をなし得る点が多いと考えている。

日本語を対象とするのなら「陳述」の用語を用いればよいという意見もあろう。しかし、これまでに多大の成果をおさめてきた「陳述」の研究を一般言語学の中に位置付け、ディスコース論やプラグマティクス等の領域と接触をはかりながら、さらに発展させるためには、「モダリティ」の用語を使用すべきである。

次に、モダリティの構造を概観してみよう。日本語の文の基本構成は、「命題」と「モダリティ」の二大構成要素から成り立っている²⁸⁾。文を、話し手が客観

的に事象や心象を描こうとする部分とそれを「素材」として話し手が自分の態度を相手に示そうとする部分から成立するととらえる考え方は、渡辺(1971)において、ひとつの体系化をみた。渡辺は、この二者を「叙述内容」と「陳述」という用語で呼んでいる。近年のモダリティ研究においても、寺村(1982)が「コト」と「ムード」と呼び、仁田(1991)も「言表事象」と「言表態度」の用語を用いている。

そして、モダリティには、少なくとも二つの異なったレベルのものが存在していると考えるのが大方の見方である。

益岡(1991)は、これを「一次的モダリティ」、「二次的モダリティ」と呼び、仁田(1991)は、「真正モダリティ」、「疑似モダリティ」としている。この二者の区別は、モダリティの性格づけに基づく区別である。モダリティは、話し手の発話時点での判断や表現態度であり、主観性の文法化されたものだとする。このため、形式自体が過去になることもなければ、否定にもならず、話し手の心的態度のみを表す表現形式をもつはず²⁹⁾だと考えられる。

「一次的モダリティ」と「真正モダリティ」とは、上記のモダリティの性格に沿った、より純粋なモダリティ要素である。これに対して、「二次的モダリティ」と「疑似モダリティ」とは、過去や否定の形式もとるうるし、客観的表現にもなりうるものである。

モダリティのカテゴリーを設定するにあたって、これまでに多くの研究がなされてきた。寺村(1982, 1984)、仁田(1989, 1991)、益岡(1991)などの諸研究がある。本稿では、モダリティのカテゴリー間の関係を、依存関係構造と位置付ける、益岡(1991)の枠組みを中心にして、論を進めることにする。ただし、益岡も注記しているように、この枠組みは数々の先行研究に負っていることも確かである。

モダリティは、表現者の判断と表現態度を表示する形式であり、次のようなカテゴリーを持つ。まず、二種のサブ・カテゴリーを認めることができる。一つは、話し手の表現態度を表すもの。これを「表現系のモダリティ」と呼ぶ。一つは、話し手の判断を表すもの。これを「判断系のモダリティ」と呼ぶ。表現系のモダリティは、発話時の、話し手の主観的な表現行為そのものであるから、すべて一次的モダリティである。

一方、判断系のモダリティは、発話時の、話し手の判断しか表せないもののほかに、客観化を許すものもある。したがって判断系のモダリティには、一次的モ

ダリティと二次的モダリティの両方がある。

この三つのカテゴリーは、概略次のような階層構造をなす。

判断系の二次モダリティ<判断系の一次モダリティ
<表現系のモダリティ (この右のほうが上位)

表現系のモダリティと判断系のモダリティの順位が逆転することはない。これは、表現系のモダリティが、文の類型を決定する働きを持っていることによる。

4.2節で触れる、伝達態度のモダリティは表現系のモダリティに含まれ、真偽判断のモダリティは判断系の一次モダリティに含まれる。

4. モダリティと文末詞との対照

4.1 形式・意味・場面との関係

文末詞とモダリティとの関係について、「(言語)形式」、「意味」、「場面」という概念を用いながら、比較検討する。

このうち、「形式」と「意味」については、さほど説明を要しないが、「場面」に関してはその内容を明確にしておく必要がある。ここでは、「場面」を次のように考えている。まず「場面」は、南(1982)における外的条件のうち、付随的状況と主体的意向として挙げられているものを含む。

付随的状況には、人間関係の条件と状況に関する条件がある。言語主体と相手や関係者との関係とその言語表現のおこる時、場所、伝達手段との関係がある。主体的意向は、言語主体の、指示対象の把握についての心理的側面、また相手に対する気持ち、意向などとされている³⁰⁾。

次に、リーチ(1987)の言う、「発話の場面」も含む。リーチによると、発話の場面には、発話の時間や場所、といった要素のほかに、(i)送信者と受信者、(ii)コンテキスト、(iii)ゴール、(iv)発話行為、(v)発話という要素が関わっている³¹⁾。

南とリーチとの規定の仕方を比べてみると、かなりの部分で一致していることがわかる。

南の「主体的意向」は、リーチの「発話のゴール」と「発話内行為」に該当すると考えられる。その発話を行うことで、何を「目指している」という点が条件として重要になってくるからである。

リーチは、プラグマティクスの立場から「発話」という語に、一般的な用語以上の意味を担わせている。リーチによると、「発話」という用語は「特定の場面における使用によってそれと認定される存在物の具体

的事例を指す」ために使用すると規定されている³²⁾。そのほかコンテキストという語に相当するものが、南には明示されていない。コンテキストを、「場面」あるいは「文脈」と同義で使用する例も見られるが、リーチは、コンテキストを次のように考えている。

すなわち、コンテキストとは、話し手と聞き手によって共有されていると想定される背景的な知識で、問題となる発話によって話し手が意味することを聞き手が解釈するのに役立つもの、と考えている³³⁾。

「場面」という語を、次のように考えておこう。「場面」という用語は、①人間関係、②周囲の状況(場所、時間、伝達手段、あらたまりの度合い)、③発話者の意向や発話者が何をを目指しているか、④発話者と受け手とが共有する背景的な知識、といった諸相を包括的に指す用語とする。そして、場面との関連で発せられたことばは、具体的な存在物としての「発話」となると考える。

モダリティ研究は、「形式」と「意味」との関係性を主として取り扱う分野である。その点で、文法論に含まれる。従来の文法論は、統語論や構文論を主軸にして、「形式」と「意味」との関係を論じてきた。これに対して、モダリティ研究は、「意味」により比重をおいたアプローチの方法をとっている。研究の中心は、表現主体が言語形式に託した判断や、顧慮といった心的態度の解明である。モダリティのカテゴリーのたて方も、この目的にそっている。多くの研究者が言語形式よりも、その意味機能に従って分類を行なっている。もちろん、モダリティを明示する形式の出現場所、接続順位を分析の手がかりにしている点は、統語論と深く関係している。

モダリティ研究に対して、文末詞研究は、「形式」の出現場所と意味とに着目する。出現場所とは文末であり、この文末を分析して、文末詞という形式を抽出してくる。同時にその形式の意味を明らかにしていく。文末に位置し、叙述構造を収約する機能があるとされる点は、統語論からの性格づけがなされている。しかし、意味に関しては、モダリティ研究における「意味」と同一のものと言いがたい面がある。文末詞のもつ意味の中で、最も重要視されているものは、「訴え」と呼ばれる機能である。「訴え」の中でもその中核を成す機能が、待遇機能である。待遇価値に相違のある、複数の文末詞の中から、適切な文末詞を選択して使用するためには、「形式」と「意味」との対応が知識として分かっているだけでは不十分である。参加者(言

語主体と相手) 相互の関係, 対象への配慮の仕方, 対象の扱い方の特徴, そのほか, 場所や時, 伝達手段なども関係してくる。つまり, 待遇は, 「場面」との関わりの中で, 実現される言語行為なのである。文末詞を記述する際に, 誰が, 誰にどのような状況で発話したのかという情報を, あわせて詳しく記述するのはこのためである。

待遇機能を文末詞の中心的な機能と位置づけている点から分かるように, 文末詞研究は, プラグマティクスの側面を持っている。藤原は, 「方言敬語法研究と, 方言文末詞研究とが, じつに, 私の高次共時方言学実践の, 二大テーマとなった。」と述べている³⁴⁾。敬語は, 日本語のプラグマティクス研究の中で, 重要な位置を占める現象である。ここで筆者なりに, 方言文末詞研究と方言敬語法研究との関連を探ると, 「待遇」という概念によって両者が結ばれていると考えられる。そして, プラグマティクスの立場から, 日本語の方言の実態をとらえようとする姿勢がうかがわれる。ここで, 文末詞研究の特徴の一つは, プラグマティクスの記述にあると述べておきたい。モダリティ研究も, 将来, プラグマティクスとかかわりを持っていくことになる。その際には, 文末詞研究の成果が少なからず役立つと考えられる。

ただし, 文末詞研究では, 待遇機能の記述を中心に据えながら, 文末詞固有の意味にも言及するのが常である。その際, 文表現類型との関わりで論じられることが多い³⁵⁾。文末詞がどのような文表現類型の中に出現するかは, その文末詞固有の意味を考えるうえで重要な手がかりとなるからである。

モダリティ研究においても, 表現類型は他のモダリティに影響を及ぼす重要な位置を占めている³⁶⁾。この点で, 文末詞研究とモダリティ研究は, 共通する分析手段を有しているといえる。

4.2 サブカテゴリーの対応

モダリティの要素と文末詞を対照するには, モダリティの(下位)分類と文末詞の(下位)分類とが, どのように対応するかを検討することが必要となる。原生的文末詞のうち感声的文末詞は, ほぼ伝達態度のモダリティに当たるものと考えられる。共通語の「ネ」, 「ヨ」に相当する文末詞は, 各地方言に見られ, ナ行音, ヤ行音, あるいはサの音声形式をとっていることが多いからである。また, 原生的文末詞のうち非感声(カの種類)の文末詞は, 真偽判断のモダリティと

関係している。しかし, 以下の理由により, 両者のカテゴリーを対応させることは, 現在むずかしい状況にある。

第一に, 分類基準が違うこと。モダリティは意味機能によって分類が行われているのに対し, 文末詞は, 形式によって分類がなされているからである。第二に, 方言文末詞の量が, 共通語の文末詞と比べ歴大な数にのぼるからである。「共通語文末詞界は, 方言文末詞界からすると, はなはだしく, 事象が単純である。共通語界では規則的に見られることがらも, 方言界では, 歴大な不規則的事実(にわかには規則を求めかねるという意味)であることがすくなくない。」³⁷⁾との, 藤原の指摘もある。共通語を資料として, 研究が進んでいるモダリティの分類では, 不十分な場合もありうるのである。

第三に, 方言文末詞の「形式」固有の機能追求が十分に行われていない面があるからである。具体的な発話を「場面」との相関のもとに記述する作業に関しては, 緻密な方法論が確立している。しかし, 記述を行った後に, 同一の文表現類型に出現する文末詞相互の関係や, 異なる文表現類型に出現する同一形式の文末詞の統一的説明を行うといった文末詞機能の抽象化と理論化には, 研究の余地が残されている。モダリティ研究における, 「ネ」・「ヨ」の研究(益岡, 1991)や「のだ」の研究(田野村, 1990)のような機能追求の視点が少ないように見受けられるのである。

そして, 上記の第二点と第三点とは深く関わっている。従来の文末詞研究は, 日本全国の方言文末詞を記述することに, 精力を注ぎこんできた観がある。その過程で, 個々の方言文末詞のもつ, 精妙な機能が明らかとなってきた。文末詞にはそれぞれに個性が認められる。理論化や抽象化において, その個性を, どこまで捨象してよいのかという点で困難さがあったのではなかろうか。事象を大切に扱おうとする文末詞研究の姿勢の現れともとれる。

しかし, 上記の第二点と第三点のような課題があるからこそ, 文末詞研究にはさらなる発展の可能性が残されていると言える。方言文末詞の多彩な事象を分析する中で, 共通語では見い出せなかった新しい知見を, 日本語研究へ加えることができる。文末詞の中でも, 複合文末詞は, 方言の中に多量多彩に存在する。複合文末詞の分析から, 日本語の持つ, 心的態度を表現する精密な機構のようなものも明かとなってくるのではなかろうか。また, 転成文末詞の存在意義ということ

も問題となってきよう。なぜ、原生的文末詞だけでなく、転成文末詞という形式が必要となったのか。転成文末詞はいかなる心的態度を表現するために、文末へ位置するようになったのか。文末詞研究への興味は尽きない。

ここで重要となってくるのが、その成果の記述の仕方である。モダリティ研究、さらに一般言語学へ転移しやすい形で、研究成果を記述しておかなければならない。そのためには、用語の検討や抽象化・理論化の作業を行いつつ、双方の間で容易に情報交換のできる環境を整えることが必要である。

モダリティ研究と文末詞研究との間に対象や目的の相違がある以上、二つの研究領域が共存することに何ら問題はないと、筆者は考える。しかし、両方の分野から生み出される卓越した知見は、日本語研究を深化・発展させるために、同一の場で議論され、知識として蓄積されていくことが望ましい。そこに、モダリティ研究と文末詞研究とのさらなる発展の可能性も広がると考えるのである。

5. お わ り に

稿を終えるにあたり、議論の流れの中で、触れることができなかった事項についていくつか述べておきたい。

第一点は、資料収集の方法に関してである。かりに「実例主義」と「作例主義」というものがあるとする。モダリティ研究においては、この両者が存在する。小説・台本から資料を収集する方法は「実例主義」、日本語話者の言語能力に基づいて例を作成する方法は「作例主義」にあたる。一方、文末詞研究においては、徹底した「実例主義」の方針がとられている。自然傍受法による資料収集の方法が、その典型である。調査者の影響を最小限にして、生活の場で使われている「発話」を記録する方法である³⁸⁾。

第二点は、文末詞研究における、文の認定方法に関してである。

文末詞研究には、「断訴法」あるいは「短訴法」とよばれる、文認定の方法がある。例えば、

ワシワ ナー。 キョネン ナー。 マコガ ナー。³⁹⁾

わしはねえ。去年ねえ。孫がねえ。

(古老男→老男女たち)

のように、文末詞を手がかりに、三文と認定する。線条的に連続する自然発話の中のどこまでを一文とするかは、大変むずかしい作業である。また文の認定は、

文の認識とも深くかかわっている。「断訴法」・「短訴法」という、文の認定の仕方は、日本人が文をどのようなものとして認識しているかという問題を考える上でも一考に値する方法である。

第三点は、文末詞研究の成果を、一般言語学へ組み込もうとする姿勢は、その研究当初からあったということに関してである。藤原興一氏の言を引用すれば、「さいわい、私どもは、ここに、文末詞という特質分子を得て、言語に関する一般言語学的な理論開拓にしたがうことができる。」と述べられている⁴⁰⁾。また、氏は、近年、『文末詞の言語学』（平成2年、三弥井書店）という著作を世に出し、いっそう、その姿勢を鮮明にしている。

本稿では、どちらかといえば、文末詞研究に関する記述が多かったかもしれない。この機会に、モダリティ研究との関わりから、文末詞研究を再考してみたいという、筆者の意図があったからである。最後になったが、諸学説とその中で使用されている用語についての解釈は、ひとえに筆者の責任によるものであることを明記しておきたい。

注

- 1) 「文末詞」の概念は藤原興一が創出したものであるが、文末詞という語が普及してきたため、現在では藤原のいう「文末詞」とは、やや異なった用法も見られる。

奥津（1974）においても、文末詞という用語が使用されている。奥津によると、文末詞は文を成立させる働きがあり、いわゆる陳述の機能を有する。このため、平叙文で文末詞が出現していない場合でも、ゼロの文末詞がついていて考える。文末詞を他の助詞などから分離した上で、文の成立に深くかかわっているとする考え方は、藤原と共通する点もある。しかし、藤原の「文末詞」と相違する点は、文末詞の決定方法にある。

奥津（1974）は、連体修飾に参加し得ない言語要素に着目して、文末詞（あるときは文頭詞）を決定している。奥津は、その際に、構文上の機能から単位要素を決定し分類すべきだと述べている。

これに対して、藤原の「文末詞」においては、機能とともに、出現位置や形態、出自を文末詞決定の重要な要件にしている。文末詞には、い

わゆる終助詞も含まれるが、これだけにとまらない。転成文末詞と呼ばれるものの中には、「助詞系」、「助動詞系」、「動詞系」、「名詞系」、「代名詞系」、さらに「文系」といった様々な出自をもつ、文末詞が存在する。

奥津は、自身の枠組みに従って文法現象を範ちゅう化したのであり、藤原においても、そうである。重要なことは、どちらの立場で「文末詞」という用語を使用するかということである。本稿においては、「文末詞」という用語を用いた場合、藤原の概念を指すものとする。

- 2) 藤原 (昭和57年), p. 3
- 3) 同上 p. 6
- 4) 同上 pp. 55-56
- 5) 同上 p. 61
- 6) 同上 p. 7
- 7) 同上 p. 11
- 8) 同上 p. 12
- 9) 同上 p. 12
- 10) 同上 p. 54
- 11) 同上 p. 54
- 12) 同上 p. 54
- 13) 同上 pp. 44-45 の記述を図にまとめた。
- 14) 佐藤 (昭和52年), p. 125
- 15) 藤原 (昭和57年), p. 46
- 16) 同上 p. 59
- 17) 「陳述」をめぐる議論は、大久保忠利 (昭和43年)『日本文法陳述論』に整理されている。
- 18) Jespersen, O. (1979), p. 293
- 19) 寺村 (1984), p. 61
- 20) 同上 p. 60
- 21) 三上 (1979)
- 22) Lyons (1977), p. 848
- 23) 近藤 (平成元年)
- 24) 益岡 (1991), p. 29
- 25) 同上 p. 30
- 26) 寺村 (1984), pp. 61-62
- 27) 益岡 (1991), p. 10
- 28) 同上 p. 34
- 29) 仁田 (1991), p. 53
- 30) 南 (1982), p. 293
- 31) リーチ (1987), pp. 18-20
- 32) 同上 p. 19
- 33) 同上 p. 18

- 34) 藤原 (昭和47年), p. 171
- 35) 藤原 (昭和48年)
- 36) 益岡 (1991), pp. 50-51
- 37) 藤原 (昭和57年), p. 61
- 38) 藤原與一監修 (昭和59年)
- 39) 佐藤 (昭和52年), p. 116 の例。
- 40) 藤原 (昭和57年), p. 73

参 考 文 献

- 江端義夫 昭和53年 尾張知多半島の一小方言の敬語法, 広島方言研究所方言研究叢書 8 三弥井書店, pp. 119-173.
- 藤原與一 昭和47年 対話の文末の「呼びかけことば」「ナモシ」類その他について一, 広島方言研究所方言研究叢書 1 三弥井書店, pp. 171-194.
- 藤原與一 昭和48年 昭和日本語の方言 第一巻 三弥井書店.
- 藤原與一 昭和57年 方言文末詞〈文末助詞〉の研究 上 春陽堂.
- 藤原與一監修 昭和59年 方言研究ハンドブック 和泉書院.
- 藤原與一 平成2年 文末詞の言語学 三弥井書店.
- Jespersen, O. 1979 *Essentials of English Grammar* London George Allen & Unwin.
- 近藤泰弘 平成元年 ムード, 宮地裕ほか編 講座日本語と日本語教育第四巻 日本語の文法と文体 (上) 明治書院, pp. 226-246.
- リーチ, G. N. 1987 語用論 紀伊国屋書店.
- Lyons, J. 1977 *Semantics 2* Cambridge University Press.
- 益岡隆志 1991 モダリティの文法 くろしお出版.
- 三上 章 1979 日本語の構文 くろしお出版.
- 南不二男 1982 現代日本語の構造 大修館書店.
- 仁田義雄 1989 現代日本語のモダリティの体系と構造, 仁田義雄・益岡隆志編 日本語のモダリティ くろしお出版, pp. 1-56.
- 仁田義雄 1991 日本語のモダリティと人称 ひつじ書房.
- 奥津敬一郎 1974 生成日本文法論 大修館書店.
- 大久保忠利 昭和43年 日本文法陳述論 明治書院.
- Palmer, F. R. 1986 *Mood and Modality* Cambridge University Press.
- 佐藤虎男 昭和52年 方言文末詞の記述—三重県鈴鹿市江島町の方言の文末詞—, 広島方言研究所方言研

- 究叢書 7 三弥井書店 所収. しお出版.
 田野村忠温 1990 現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意 寺村秀夫 1984 日本語のシンタクスと意味Ⅱ くろ
 味と用法 和泉書院. しお出版.
 寺村秀夫 1982 日本語のシンタクスと意味Ⅰ くろ 渡辺 実 昭和46年 国語構文論 塙書房.

Summary

The purpose of this paper is to compare the category of modality with that of 'Bunmatsu-shi (文末詞)'. Most of modal elements appear at the final position of sentences in Japanese. In the study of current Japanese, the notion of modality is applied to standard Japanese (共通語). 'Bunmatsu-shi' is a technical term introduced by Y. Fujiwara in dialectology of Japanese. 'Bunmatsu-shi' means a part of speech to express respect to a person at the final position of sentences. Modal elements and 'Bunmatsu-shi' have the same features in its position and function. But 'Bunmatsu-shi' has more different styles in dialects than in standard Japanese. Therefore, function of each element in 'Bunmatsu-shi' has not been studied well, unlikely 'NE (ね)' and 'YO (よ)' in standard Japanese. If the two fields, modality and 'Bunmatsu-shi', should be combined and be related each other as a target of the study, it will make a great progress in the study of Japanese.